
バカとテストと召喚獣とまぶらほと

蒼鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣とまぶらほと

【Nコード】

N7082K

【作者名】

蒼鷹

【あらすじ】

何処にでもいそうな極普通？の少年式森和樹。彼は文月学園に通う学生である。そんな彼が2年生に進級した時、明久達が起こす騒動に巻き込まれていく……

この作品はバカとテストと召喚獣とまぶらほのクロス作品です。

一応、バカとテストと召喚獣は一部を除いてほぼ原作どおりですが、まぶらほ側は多数オリジナル設定を組み込んでいます。クロスオーバー・オリ設定が苦手と言う方は読まないことをお勧めいたします。因みに、和樹はバカテスト原作キャラではなくまぶらほ側のキャラ

とのカップリングとなります

〈設定編〉（前書き）

はじめまして。この作品はあらずじに書いたとおりバカとテストと召喚獣×まぶらほのクロス作品です。とりあえず、まずは設定から

〈設定編〉

〈設定〉

？裏の世界として魔法関連はありますが、まぶらほ世界における魔法回数設定は

本作にはありません。

例として『葵学園』は本来なら『エリート魔術師養成学校』ですが本作では

『日本有数の進学校』となっています。

また、魔法関連設定や裏の世界が本編で出ることとは現在の所ほぼ無いです。

？今の所、本作でまぶらほ側の登場人物は『式森和樹』、『リーラ・シャルンホルスト』

と後1人になっており現状、例の三人娘の登場予定はありません。

？まぶらほからの登場人物には全員オリジナル設定が加えられています。

特に和樹はかなりオリキャラ になっているかもしれませんが、ご注意ください。あとリーラも結構オリキャラに近いかもしれません。

〈人物設定〉

名前：式森 和樹 性別：男性

まぶらほの主人公、原作では成績不振、運動音痴だが本作では成績、運動共に常に

平均をキープしている。一年の二学期にある理由から葵学園からリーラと一緒に転校してきた。

既にリーラ達『第五装甲獵兵侍女中隊』と誓約している。

しかし、現状は和樹はまだ高校生なので『第五装甲獵兵侍女中隊』はリーラ以外

式森本家に滞在している。基本的にお人好しの為、明久達が巻き起こす騒動に

巻き込まれることが多々ある。

現在は学園近くの高級マンションにリーラと二人で暮らしている。

無論、リーラとの関係や『第五装甲獵兵侍女中隊』、式森本家の事は皆に秘密にしており

学校では、少々強引に幼馴染として通しているが、いつも一緒にいる事から

それ以上の関係ではないか？　　と常々疑われているのが現状である。

特に勘のいい友人には付き合っていると思われる。

家事もある程度出来るが、リーラの足元にも及ばない（当然である）ただ、料理は何となくリーラに頼んで教えてもらった為結構な腕前を持つ。

名前：リーラ・シャルンホルスト 性別：女性

おなじみMMMの第五装甲猟兵侍女中隊の大尉。家事全般は当然ながら介護、

戦闘機の操縦、マネートレードによる利殖etcと何でも完璧になすスーパーメイド。

本作では和樹と同年と言う設定になっている。

当然原作と同じく和樹の事が好きであり、和樹の事を第一に考えている。

和樹の呼び方は『和樹様』だが、学校や友人達がいる前は『和樹さん』である。

これは和樹が頼み込んだ結果しぶしながらも了承したから。

当然、成績優秀、運動神経抜群、容姿端麗として有名。学力は大体、姫路瑞希と

同じ位として知れ渡っているが、これはリーラの本気の成績ではない。

家では当然家事等全てやっており、当然和樹の毎日のお弁当もリーラが作っている。

物語が進むにつれて必要なら設定を追加していきます。

「プロローグ」(前書き)

まずはプロローグからです。初投稿で遅筆ですがよろしく願います。

プロローグ

四月。それは桜が咲き誇り、学生達が新学年を迎える月。

ある街の一角にあるマンションの一室にて、一人の少年が幸せそうに眠っていた。

少年の名前は式森和樹、その風貌は何処にでも居そうな極普通の少年に見える。

しばらくして、少年が寝ている部屋のドアがコンコンと叩かれた。

「失礼いたします」という声と共に薄い茶色の瞳と長く美しい銀髪が印象的な欧州系の

美少女が深々と礼をして部屋の中に入ってくる。

少女が身に纏っている服は一般的な私服ではなく、紺色のスリーブに余裕を持った

ブラウス。裾の広がったスカート、白い前掛け、頭にはカチューシャ。

少女はまるで絵に描いたようなメイドであった。

少女の名前はリーラ・シャルンホルスト。式森和樹に仕えるメイドである。

リーラは未だに幸せそうに眠っている少年を見て微笑むとゆっくり少年の眠るベッドへ近づく。

「おはようございます和樹様、朝です。起きて下さい」

「ん……………」

しかし、リーラの声に和樹は反応するも寝返りを打つだけで起きる気配は無い。

そんな和樹の様子にリーラは困った表情を浮かべながらも少し嬉しそうに起こし続ける。

「和樹様、今日は始業式ですよ。早く起きないと遅刻になってしまいますよ?」

「ん…………ふぁぁ」

そして、ようやく和樹は起床した。ベッドから起き上がると大きく伸びてから
自分を起こし続けてくれたリーラに振り向く。

「おはよう、リーラ」

「おはようございます、和樹様」

「いつも起こしてくれてありがとう、僕って何故か日常は朝に弱いからね。本当に助かるよ」

「和樹様の身の回りのお世話も私のつとめ。そう申されるのは私にとってこの上ない喜びです」

リーラは洗練された動きでテキパキと和樹の着替えを用意すると、それを机の上においた。

「では、私は朝食を準備して参ります」

「うん、よろしく頼むよ」

「はい、お任せくださいませ」

そうして、深々と一礼してリーラは部屋を後にする。

「さてと、僕もまずは目覚ましついでに顔を洗ってくるかな」

和樹も洗面所に入っていた。

洗面、朝食を済ませた和樹は文月学園の制服に急いで着替え、鞆を手に玄関に急いだ。

そこには、和樹と同じく文月学園の制服を着て、鞆を持っているリーラの姿があった。

ついさっきまでメイド服を着ていたはずなのに、何時の間にかキツチリと着替えて

玄関で自分を待っているリーラに和樹は微笑して促す。

「おまたせ、じゃあ行こうか」

「はい」

家の鍵を施錠し、再度確認してから二人はマンションを後にした。

「桜かぁ、もうすっかり春だね」

「今日は快晴らしく絶好の花見日和らしいです」

学校へ行く最中の道、満開に咲いている桜を見ながら雑談を交わす。

やがて、校舎へと続く坂道、そして先ほど以上に満開に咲き誇る桜の木々が見えてきた。坂道を登り、校門に着くと二人は門の前にいる教師に声をかけた。

「「おはようございます、西村先生」」

「おはよう、式森にシャルンホルスト」

朝の挨拶を交わすと、西村教諭は二人にそれぞれ封筒を手渡した。封筒の宛先には

それぞれの名前が書かれている。

「お前達も知っているだろうが、その封筒に一年の終わりに行った振り分け試験。

その結果による所属クラスが書かれている紙が入っている……まあ、結果はお前達が良く分かっていると思うが」

和樹とリーラは同時に封筒の中から紙を取り出す。紙にはそれぞれ『式森和樹——F』『リーラ・シャルンホルスト——F』と書かれていた。

「まあ、当然ですよ。振り分け試験を途中で辞退しちゃったんですし」

「和樹さんの言う通り、これは当然の結果ですね」

「全く、本来なら式森はC、Dクラス辺りだろうし、シャルンホルストはAクラス確定だろうに」

西村教諭の最もな言葉に苦笑いしながら和樹は封筒を鞆に仕舞う。和樹は常に平均クラスの実力しか示していないが、リーラは容姿端麗

成績優秀、運動神経抜群で知られており、その成績は常に学年トップクラスである。

また教師からの信頼も厚く、数多くの告白を受けているのだが、リーラ本人は当然

和樹一筋なので全て断っている。

「まあ、あの時は家からの緊急の呼び出しで仕方なかった訳ですし、こうなった以上僕達はFクラスで頑張りますよ」

「そうか、お前達がFクラスの暴走の抑止になってくれる事を願っているよ」

「その言い方ですと、やっぱりFクラスには問題児が集っているんですね……？」

「ははは、その辺りの事は自分で確かめてみると良い」

「分かりました、そうさせて頂きます」

「それでは西村先生、また」

そうして、和樹とリーラは校舎へと歩いていった。

「それにしても、リーラもあの時本家に呼ばれたのは僕だけだった

んだから

わざわざ試験を辞退してまで着いて来なくても大丈夫だったのに、リーラだったら西村先生も言った様にAクラス確定だったのになあ」

「和樹様。その事は前に申し上げた通り私は和樹様に仕えるメイドです。」

いかに本家の召集で安全が保障されていようと和樹様のメイド長として、お傍を離れる訳には参りません」

「うーん、そこまで気にしなくても大丈夫だと思うんだけどな」

靴を履き替えた二人は、そんな話を話しながら廊下を歩いていた。

「それにしても、問題児が集まったクラスか。ねえリーラ、何故か僕……あの1-Bを思い出すんだけど」

「流石にあれ程のクラスはあり得ないと私は思いますが」

そう、なにせ二人が言う『あの1-B』とは『人の不幸は蜜の味。人の幸福砒素の味』

『他人を信じるな。友人は特に』『世界の破滅より己の利益』etcといった事を

モットーに掲げているようなクラスであつたのだ。

誰もそんなクラスの様になつてとは思いたくは無いだろっ。

「そうだね、流石にアレは無いかな」

そんな話をしている内に二人は教室の前に辿り着く。
そして、和樹はゆっくりと教室の扉を開けた。

「おはよう」「おはようございます」

挨拶をして和樹とリーラは教室に入る。

それを見て一人の男子生徒が二人の下にやってきた。

坂本雄二、一年の時に転入してきてからの和樹の友人の一人である。

「よう、どうしたんだ？ お前らFクラスに何か用事でもあるのか？」

「おはよう雄二。僕達もFクラスに配属されたからこの教室に来たんだよ」

それを聞いた瞬間、雄二は驚愕した。

「僕達……？ はあ！？ 百歩譲って和樹は理解出来なくはないが……学年トップクラスのシャルンホルストはあり得ないだろ！？ 何かやらかしたのか？」

「何気に僕がFクラスってというのは納得しているんだね雄二は」

友人の言葉に少々傷つく和樹、後ろではリーラが心配そうな表情を浮かべている。

「雄二達じゃあるまいし僕達は何もやらかしてないよ。ただ、振り分け試験を途中辞退しただけさ」

「はい、私も少々家の用事で和樹さんと同じく試験を辞退した為、このクラスに配属されました」

二人の返事に雄二はなるほどなっと納得する。

「はろはろ〜お二人さん、一年間よろしくね〜」

「お早うじゃ和樹、シャルンホルスト。これから一年よろしく頼むぞ」

「……………一年間よろしく」

雄二に説明を終えた二人にまた、声がかかる。

島田美波に木下秀吉、土屋康太。三人とも雄二と同じく和樹達の友人である。

「ああ、お早う木下、島田、康太。こちらこそ一年よろしく」

「お早うございます木下さん、美波さん、土屋さん。また一年間よろしくおねがいします」

「それにしてもリーラがこのクラスに来るのは予想外だったけど、良かったわ。

女子はウチだけかと思っちゃったし」

「Fクラスは私と美波さん以外は皆男子生徒ばかりみたいですね」

改めて、和樹はこれから自分達が学ぶ教室を見渡す。カビ臭い畳みに、罅割れが

目立つ壁。卓袱台に、綿がほぼ入っていない座布団。
隙間風が入ってくる割れた窓ガラス。

これ程廃教室という言葉がピッタリな教室は無いだろう。

「ある意味凄まじい教室だね。ここまで来ると廃屋と言っていいかも……」

「そうよねえ。これは酷過ぎるわ」

「まあ、Fクラスだからなあ」

これ、掃除してもあまり変わらないんじゃないかな？と和樹が思った時だった。

「（和樹さん）」

リーラが真剣な表情をして小声で和樹に話しかけてきた。

「（どうしたのリーラ？）」「

「（この教室の設備なのですが、これはあまりにも酷過ぎます。和樹様が学ぶ教室として相応しくありません。ですので、早急に学園長に設備改善を要求しようと思うのですが）」

「（んー、多分無理だと思うよ。あの学園長はこういう事には絶対に応じないと思うし）」

和樹の最もな意見に納得するも、諦めるリーラではない。

「（……………でしたら、私が第五装甲獵兵侍女中隊を率いてこの教室の改修及び設備を）」

「（それも無理だと思う。第一、それを認められちゃったら他のクラスが不満を爆発させるだろうし。」

それに、この為だけに本家に待機してもらってる『第五装甲獵兵侍女中隊』を呼び出す

と皆に悪いし後々面倒な事になりそうだからね）」

「（ですが……）」

「（僕は大丈夫だよ。あの1・Bに比べたらこっちの方がまだマシだし）」

「（………分かりました。和樹さんがそう仰るのなら）」

「（僕の為に言ってくれて、ありがとうリーラ）」

「（勿体無いお言葉です）」

「何こそこそ話してるんだお前ら？」

二人の様子に気がついた雄二が話しかけてくる。

「いや、何でもないよ。それより、もうHR開始時間だけどまだ先生来ないね」

咄嗟に話を逸らす和樹。確かに彼の言う通り、HRが始まる時間にも関わらず先生の姿は何処にも無い。

「仕方ない、先生が来るまで俺が変わりにやっとくか」

そう言いながら、雄二は教壇に立って騒いでいるクラスを纏め上

げる。

その行動はかつて神童と呼ばれただけあって、かなりのものだった。

あれ程騒いでいたクラスメイト達が雄二の発言で皆になっている。

「流石は雄二、この程度はお手の物だね」

「そうですね、坂本さんは指導者としてはかなりのものです」

「坂本じゃないとこのクラスを纏め上げれそうにないわね」

「流石はかつて神童と呼ばれていた事はあるのう」

雄二の手際の良さに全員が関心していると、いきなり扉が開いた。

「すみません、ちょっと遅れちゃいました」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

入ってきた男子生徒は愛嬌よく言うも、雄二にあっさり無視され罵倒される。

入って来た男子生徒はこれまた、和樹達も良く知る友人の一人吉井明久であった。

同時に担任の先生も着たようで雄二も自分の席に戻っていった。

「やっぱり、明久もFクラスみたいだね」

後ろの方の席に座った明久に声をかける和樹。

「あれ……？ 和樹に……シャルンホルストさん！？ 和樹は解らなくも無いけど
どうして、常に学年トップクラスのシャルンホルストさんがここに
いるの！？」

「明久も雄二と同じ反応するんだね……」

先程の雄二と同じ反応をしてくれた明久に、和樹は雄二にした説明を再び繰り返す。

「なるほど、だから二人がこの教室にいるのか」

「そういう事、だからまあこの一年よろしく」

「吉井さん、この一年間よろしくお願いしますね」

「うん、こちらこそ」

「さて、それではHRを始めましょうか。まずは皆さんの設備確認
をして

から、各自の自己紹介から始めましょう」

そんな会話を交わしている内に教師はようやくHRを始める。

「教室の設備は酷いけど、B組とは違って賑やかで楽しそうなクラスになる予感がするよ」

「そうですね。私もそう思います」

和樹とリーラは賑わう教室を見て、そう笑いあった。

「プロローグ」(後書き)

という訳で、プロローグでした。

設定で書いているとおり、バカテス側のキャラは基本原作通りですが、まぶらほ側の和樹は強化補正してあります(リーラはする必要もなし)まぶらほ側からは後に一人登場させる予定です。

次から本格的に物語を進めていく予定ですのでよろしくお願いします。

誤字。脱字等あれば連絡していただけるとうれしいです。

では、また次話でお会いしましょう

第一話 『試験召喚戦争準備編』（前書き）

遅くなりましたがようやく第一話を投稿します。
誤字脱字があれば知らせてくれると助かります。

第一話 『試験召喚戦争準備編』

問題　　～化学～

【調理の為に火をかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に

選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい】

姫路瑞希の答え

【問題点：マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であると言う点】

【合金の例：ジュラルミン】

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

リーラ・シャルンホルストの答え

【問題点：マグネシウムを空气中で熱すると酸素と激しく化学反応するので危険】

【合金の例：ステンレス鋼】

教師のコメント

正解です。シャルンホルストさんも引っかけりませんでしたね。

式森和樹の答え

【問題点：マグネシウムに炎をかけると空气中の酸素と反応し眩い光を

発するので危険な為

【合金の例： 白金】

教師のコメント

正解です……と言いたい所ですが見事に引っ掛かってくれました。この問題では合金を一つ挙げなさいと問われているので残念ながら不正解です。しかし、何故消しゴムで消した後に「ステンレス」という答えが見えるのでしょうか。

土屋康太の答え

【問題点：ガス代を払っていなかったこと】

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

【合金の例：未来合金（↑すごく強い）】

教師のコメント

すごく強いと言われても。

「では、設備確認も終わったことですし自己紹介を始めましょうか」
クラス設備の確認が終わると、続いて自己紹介が始まった。
つと言っても、設備確認する必要が無かったような気がしたのは
気のせいではないだろう。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。色々あるじゃろうが
この一年間よろしくたのむぞい」

「……………土屋康太」

「島田美波です。ドイツ育ちで、日本語は会話は出来るけど読み書きが苦手です。」

あ、英語も苦手です。趣味は吉井明久を殴ることです」

最初は秀吉から始まり、続いて康太、美波と自己紹介は続く。

「えゝ、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね」

「……………ダアアーリイーン!!!!」

軽いジョークのつもりで言ったようだったが、想像以上に不快だ

ったのか

明らかな作り笑いを浮かべる明久。

「——失礼、どうか忘れて下さい。とにかくよろしくお願いします」

作り笑いのまま席に着席した明久を見て、苦笑いをする和樹。

「明久。まあ……その、忘れた方がいいよ」

「言われなくてもそうするよ。……まさか本当に呼ばれるとは思わなかった。

うえ……気持ち悪い」

そして、それから少しして和樹の番が回ってきた。

「式森和樹です。これからの一年間よろしくお願いします」

極普通に自己紹介を終え、ゆっくりと座ると次はリーラが立つ。

「リーラ・シャルンホルストです。ドイツ人ですが、日本暮らしが

長いので日本語は

問題無く使えます。皆さん、一年間よろしくおねがいします」

『えっ？』

紹介を終えると共に深々と、礼をするリーラ。

すると、急に教室中から驚いた声が挙がった。

欧州系の整った美貌に、長く美しい銀髪。真っ白な肌とかなり目立つ容姿を持つ為

リーラは、その成績と共に学年中に知れ渡っている。故に彼女がこの教室に居る事

自体信じられないのだろう。最も、それを素早く察したリーラはこれ以上騒ぎになる事

を防ぐ為に、手短に理由を説明して、そのまま席に座る。

「お疲れ、リーラ」

和樹は、そんなリーラに一言労いの言葉をかけた。

「ありがとうございます和樹さん。しかし、正直ここまで知られているとは

思っていませんでした」

「まあ、リーラは成績優秀で綺麗だからね。当然だと思うよ」

「か……和樹様」

思わぬ和樹の不意打ちに顔を赤くするリーラ。呼び方も動揺の為か『様』

に戻っていたが、幸いにそれを聞いたものは誰も居なかったようであつた。

そんな間にも自己紹介は次々と進んでいき、後残り数人という時だった。

突然、教室の扉が開き一人の女子生徒が入ってきた。

「あの、遅れて、すいま、せん……………」

『ええっ？』

そして、また教室全体が驚いたような声があがった。

その少女がこの教室に来た事に、和樹やリーラでさえ驚いた様な表情を

している。まあ、それも仕方無いだろう。

何せ入ってきた女子生徒は、リーラと同じ位この学園で有名な女子生徒なのだから。

「丁度良かったです。今、自己紹介をしている所なので姫路さんもお願ひします」

「は、はい！ あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします……」

瑞希の自己紹介にざわめくクラス。そんな彼らの声を代表してか、一人の男子生徒は手を挙げた。

「はい！ 質問です！」

「あ、は、はいっ。何ですか？」

「何でここにいるんですか？」

男子生徒は、このクラスのほぼ全員が疑問に思っている質問をした。

「そ、その……振り分け試験最中高熱を出してしまって……」

その答えに、クラス全員が納得した。事情は違うが、様は和樹やリーラと同じという訳であった。

「で、ではっ、一年間よろしく願いしますっ！」

そう自己紹介を瑞樹はそのまま空いている席に座った。

安堵の息をついて卓袱台に突っ伏す瑞樹に、明久が話しかけようとして

それを雄二に邪魔されている。しかし、それでもめげずに瑞樹に話しかけようと

チャンスを伺っている明久。そんな光景を見ながら、和樹は呟いた。

「しかし、まさかこのクラスに姫路さんまで来るとは予想外だったよ」

クラスは違ったが、姫路瑞樹とリーラは何時も大体同じ点数の為、その関連で

二人は仲良くなり、和樹もリーラ経由で瑞希と友人になっていた。

「私も少々驚いています。彼女の实力は学年次席クラスですから、間違いなく

Aクラスだと思っていました」

「まあ、それはリーラにも言える事なんだけどね」

現在の所、リーラと瑞樹との点数の差は殆ど無い。しかし、和樹

は知っている。

リーラは何時も点数を次席クラスに抑えていると言つことを。そして、その理由も。

「それを仰るのなら、和樹さんですよ?」

「……………そうだね。でも、僕は今が気に入ってるから。リーラはどう?」

「私も、今が気に入っています」

そう、笑いあう二人。

「はい、皆さん。そろそろ静かにしてくださいね」

何時まで経つても騒がしい生徒たちに福原教師は、警告のつもりで軽く教卓を叩く。
すると……

バキィッ バラバラバラ……

軽く叩いただけで教卓は崩れ落ち、ものの見事にゴミ屑となった。

「え……替えを用意してきますので、皆さんは少し待って下さい」

もはや、完全に崩れた教卓と足早に教室から出て行く担任を、和樹は

何ともいえない表情で見る。

「少し叩いただけで崩れる教卓か……まさかここまで酷いとは」

小さくため息を付いた。そして、何となく扉の方を見てみると

「ん？」

なにやら明久と雄二が廊下に出て行く所が見えた。

「リーラ、明久と雄二が廊下に出たみたいだけど何かあったの？」

「いえ、特に何も問題は起きていないみたいですが……」

後ろの方を見ても、特に変わった様子はない。

「リーラ。とりあえず、姫路さんにも挨拶をしておこうか」

「わかりました、和樹さん」

担任が出て行っており、現状何もやる事がないのならば、これから共に学ぶ

知人に挨拶をするのが良いだろう。幸い、席も近いのでそのまま声をかけた。

「おはよう、姫路さん」

「おはようございます、瑞希さん」

「あ、式森くんにリーラちゃん。おはようございます」

笑顔で挨拶を返す瑞希。そして、ふと気がついた。

「あれ……？　どうして、二人ともここに？」

やはりというか、先程の雄二達と同じく驚いている瑞希。

「まあ、姫路さんと同じ様な理由だよ」

そして、和樹は本日3度目となるが簡潔に経緯を説明する。

「なるほど、そうだったんですか……」

「はい、ですから瑞希さんも今年一年よろしくお願いします」

「同じく、よろしくね」

「あ、はい！　こちらこそよろしくお願いします」

それから3人で談話していると、廊下に出ていた明久と雄二が教室に戻ってくる。

「よう、何か三人で仲良くしてるな。シャルンホルストと姫路が仲が良いのは知って

たが和樹、お前も姫路と仲が良かったのか？」

「あ、確かに僕も気になるかも」

二人の疑問に、そういえば話してなかったな〜と和樹は思い出す。

「うん、姫路さんとは去年リーラ経由で知り合ってそれ以降友達なんだよ」

別段、隠す事でもないのと和樹はあっさりと答えた。

「なるほどなあ、確かお前とシャルンホルストは幼馴染だっけ？」

「へえ〜」

そうしている内に、担任が教卓の替えを持って戻ってきた。

「さて、では自己紹介の続きをお願いします」

そして、再開される自己紹介。

今度は、別段中断されるような問題も起こらずスムーズに進んでいく。

「坂本君、君が最後の一人ですよ」

「了解」

呼ばれた雄二は立ち上がると、何時もとは違う雰囲気で教卓の前に立つ。

「さてと、俺がFクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも好きに呼んでかまわない」

簡潔に自己紹介をして、そしてここからが本番だと雄二は気を引き締めた。

「さて、皆に一つ聞きたい。Aクラスは冷暖房完備、座席はリクライニングシートらしいが」

そこまで言い一旦切ると、雄二はゆっくりと教室を見渡し、生徒達も同じ様に周りを見渡す。

カビ臭い教室。

古く汚れたボロ座布団。

薄汚れた卓袱台。

ガラスが割れており、隙間風が入る窓。

そして、言葉の続きを放つ

「……………不満はないか？」

「「「「「大ありじゃあつ！！！！！！」」」」」

一部を除いた男子生徒ほぼ全員が魂の叫びを上げる。

その叫びを聞いた雄二は「だろっ」と納得し、さらに言葉が続けた。

「皆の意見は最もだ。そこで、これは代表としての意見だが——」

生徒全員を見渡して——

「——FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

——雄二は宣言した。

雄二の突然の無謀とも言える意見に教室中から悲鳴のような声上がる。

『Aクラスに勝てるわけがない』

『これ以上設備が落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんやシャルンホルストさんがいれば、それで良いじゃないか』

そんな中、和樹とリーラは至って冷静に前に立つ雄二を観察していた。

「雄二はどうかやら本気でAクラスに勝つ気でいるみたいだね、リーラ」

まだ、付き合いは短いが、和樹は雄二が何の作戦や考えもなしにこのような事を

いう男ではない事は十分知っている。つまり、雄二が仕掛けると言った以上

このクラスの現状を考慮した上で勝算はあるという事に他ならないのである。

「はい、それに……後ろを見てください和樹さん」

リーラの視線の先には、決意の表情を浮かべている明久がいた。

「……なるほど、明久が本気になっているのか。姫路さん関連かな。って事はさっき二人が廊下で話していた事はこの事だったみたいだね」

「恐らく、間違いないかと思います」

その答えを聞くと、和樹は少し考えるような仕草をして、再びリーラに問いかけた。

「ねえリーラ。君から見てFクラスはAクラスに勝てると思う？」

「そうですね、普通にやっては勝ち目はないでしょう。ただ、状況と作戦によっては勝てます」

「なるほど。ということは、リーラが指揮官なら勝てるって事？」

「もちろんです、和樹さんが望むのならですが」

「流石はリーラだね」

本当に、何でもこなしてしまうリーラを改めて凄いと認識する和樹。

そして、小声でリーラにだけ聞こえる様に今回の考えを話した。

「でも、今回は全て明久や雄二達に任せようと思うんだ。僕達は友人として、クラスメイトとして明久達に協力と思う」

「私も賛成です」

和樹の考えを即座に了承するリーラ。まるで、和樹の考えが分かっているような反応だった。

「――Fクラスは『試験召喚戦争』で勝てる要素が集まっている。」

それを今から俺が説明してやる」

気がつけば、和樹とリーラが話している間に雄二も話を進めていた。

雄二は、ふと視線をある方向へと向け、視線の先にいる男子生徒に呼びかけた。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ！」

雄二の言葉に、必死に顔と手を振って否定のポーズを取るも、顔にくっつきり付いた

畳の後を隠しきれていない康太。

しかし、そんな事は関係ないとばかりに雄二は、前に来た康太の秘密を呆気なくバラした。

「まずは、土屋康太。こいつがあ有名な、『ムッツリーニ』だ」

「……………！！（ブンブン）」

彼らにとって、驚愕の事実にまた教室中が騒がしくなってきた。

「ムッツリーニだと……………？」

「馬鹿な、奴がそうだというのか？」

「だが見ろよ。あそこまで明らかな覗きの証拠を必死に隠そうとしているぞ」

「ああ、ムッツリの名に恥じない姿だ」

ムッツリーニという名は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を

以って挙げられる。故に、和樹も噂程度なら聞いたことがあった為少し驚く。

しかし、隣にいるリーラは対象的に全く驚いた様子もなく、とつ

く知ってしまったという様な感じであった。

「あれ？ リーラは康太がああムッツリーニだって知ってたの？」

「はい、以前から私の写真を撮ろうとしており、その度に撃退をしていますから」

リーラクラスとなれば、確かにムッツリーニに狙われるであろうが、その言いようから

どうやらリーラは、あの手この手で来る彼を悉く撃退している様だった。

因みにこれは和樹が知らない事だが、ムッツリ商会で取り扱って

ない写真はリーラだけらしい。

「ははは、流石はMMM『第五装甲獵兵侍女中隊』の若き大尉」

和樹は誰にも聞こえない様な小声で思わず呟いた。

「姫路やシャルンホルストの実力は皆よく知っているはずだ。説明の必要すら無いだろう」

「えっ？ わ、私ですかっ？」

「わかりました。出来る限りの事は協力させて頂きます」

「ああ、ウチの主戦力組だ。期待している」

確かに、学年次席が二人いればかなりのアドバンテージになるのは明白である。

「式森和樹もいる。A、Bクラスには及ばないがそれでも、Cクラスの実力を
持っているからな」

「まあ、期待はしないでほしいな雄二」

その瞬間、視線が全て和樹に集中する。

「おい、式森和樹って……アレだろ？」

「ああ、確かシャルンホルストさんと幼馴染で、転入してからずっと彼女と一緒に居る事から、付き合っているという噂が立つ」

「なにい！？ おのれえ！　なんてウラヤマシイ……」

クラスの大部分の男子からの嫉妬の視線に晒される和樹。

「（本当の事が知れたら大変なことになりそう）」

絶対に知られない様にしなくてはっと、和樹は心の中で誓いを立てる。

「それに木下秀吉もいるし、俺だって全力を尽くす」

「木下秀吉って確か、木下優子の……」

「確かに、坂本はなんだかやってくれそうな奴だ」

「坂本って、小学生の頃は神童って呼ばれていなかったか？」

「なら、このクラスは実力がAクラスレベルが三人、Cクラスレベルが一人いる事だな！」

これ以上ない位士気が盛り上がるFクラス。しかし……

「それに、吉井明久だっている」

………シン——

先程までの士気の高まりが一気に静まり返った。

「ちょっと雄二！ どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！ そんな必要全くないはずだよ！」

「どうやら皆知らないようだから教えてやる。コイツの肩書きは」

観察処分者』だ」

思わず、明久が抗議するが完全に無視して続ける雄二。
そして、明かされた事実を聞き誰かが容赦なく口にした。

「……それって確かバカの代名詞じゃかったっけ？」

「違うよ！ ちょっとお「そうだ、バカの代名詞だ」僕の台詞遮ってまで

肯定するなバカ雄二！」

「とにかくだ。まずは俺達の力の証明として、Dクラスから征服しようと思う」

「もう、僕の言う事なんて完全に無視ですか……」

悉く無視され続けた明久は力尽きた戦死の様な表情で卓袱台に突っ伏した。

明久の状態とは無関係に、クラス内の士気はまた異常なほどに高まっていく。

「皆、この境遇は大いに不満だろう！」

「「「当然だ!!」」」

「ならば全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！」

「「「おおーっ！」」」

「俺達に必要なのは卓袱台じゃない！ Aクラスのシステムデスクだ！」

「「「うおおーっ!!」」」

そうして、クラス内が雄叫びを挙げている中、和樹は突っ伏している

明久に近づくと元気付ける為、一声かけた。

「まあ、明久。そのうち何かいい事あるって」

「ありがと和樹」

その後、雄二に騙されて明久はDクラスへの宣戦布告の使者になり、身体的にも

精神的にもボロボロになって戻ってきたのであった。

第一話 『試験召喚戦争準備編』（後書き）

という訳で第一話でした。更新遅れて申し訳ない……

因みに、リーラはムツツリー二に写真一枚撮る事もさせてませんが、和樹がお願いすれば、いくらでも撮らせてくれるでしょう。

次回はDクラス戦です。無論、和樹やリーラも戦います。更新は遅めになるでしょうがこれからも宜しくです。早くまぶらほのあのキヤラを出したいですがそれも少しの我慢……

では、また次話でお会いしましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7082k/>

バカとテストと召喚獣とまぶらほと

2010年10月11日02時22分発行